

## Line 座談会～ケアについて～

### 臨床文藝医学会

井本：みなさま、新年あけましておめでとうございます。昨年の混沌を持ち越すどころかいよいよ混沌を深めながら新年を迎えた感があります。しかし、昨年是我々の法人が誕生した記念すべき年でもあります。今年はみなさまと一層法人活動を充実させられればと思います。

大いに楽しみましょう。

皆さん、もしよかったら、ここに近況や新年の抱負を簡単にでもよいので書き込みませんか？公だけでも、私だけでも、僕のように公私混同させたって構いません。お時間あるときには是非少しでも教えてください。

さて、言い出しっぺの僕から。僕は今年から感染症科です。この時代にこうやって関われるのは有難いことです。久々の病棟は不安ですが、まあ、賽は投げられたわけです。5月に3人目のチビが生まれる予定です。まあ、ぽんぽこ出て

くること。2021年度は感染症科、2022年度は緩和ケア科。その翌年の2023年度に開業を考えています。来年度に僕の近くでもいくつかの新規開業があります。いわゆる2025年問題を念頭においてのことでしょう。加えて、コロナ禍で外来の収益が壊滅的になっているようで、訪問診療に熱い視線がより一層注がれていようです。

訪問診療はある意味簡単で、皆さんもすぐに身につけることと思いますが、われわれのように強固な意志を持った小集団はそう現れるものではありません。従って、依然敵なし、と考えています。（とは言っても一応、市場調査のようなことはしようと思っていますが。）

われわれの力強い小集団が暗躍する時は近いです。皆さん、今のまま力を蓄えてくださいね。

ブログには引き続き、後輩とのことについて記載しています。しば

らく滞っていましたが、先ほどいくつか書きました。みなさまと共有できれば幸いです。

新年から冗舌ですみません。今年もどうぞよろしくお願い致します。

三浦：みなさま、あけましておめでとうございます。初詣というか現実逃避でいま病院に來ています。元日の病院は静かですね

井本さん、記事ありがとうございます。（井本さんの）大きい物を拝む、物騒ですが今後の私たちの活動の原点になりそうですね<sup>1</sup>。

個人的なことですが病院にいつまでいるかは、神のみぞ知るところでしょうか。2023年の開業にまずどのような形で関わっていけるか、またあらためてお話ししましょう。ところで本日実家から届いた犬の動画で母が、「ころなちゃん」と呼びかけておりました。

おそらく実際の名前の「ころ」と孫の名前の「ひろな」が混ざったのでしょうけど、近頃のコロ奈ちゃんは生半可ではないですね。当院の発熱外来でも最近では1日6人

ほど陽性者が出ることも。

どうかご自愛ください。いまは力を蓄え、時機をとらえて一物掲げましょう。今年もよろしく願いいたします。

羽賀：あけましておめでとう御座います。新年を迎え皆さんと分かち合えることを心より嬉しく思います。本年もよろしく願いします。

新年をむかえ、只今私は人生の旅の分岐路へと差し掛かっている、そんな気持ちです。

このまま半端な状態で進むことは誰の為にもならないと焦る気持ちもあり、転科も視野に入れた進路選択を検討中です。内科は難しい。というか人と協働することはとてもエネルギーを使うことです、私にとって。

ですが実家でNHKのドキュメンタリーなんぞ見てみますと、終末期医療に内科的に携わりたいのだなと思っている自分がいます。深刻そうな言い方をしましたがある意味では、とるに足りないことです。

---

<sup>1</sup> 大いなるもの(<https://clinical-arts.com/blog/2021/01/01/242/>)

興味を持ったところへ突き抜けていきたいと思います。

最近 YouTube で本の解説動画（音声）を見るが増えました。本を自分で読むよりも誰かの言葉を通す方が楽ですね。これは良し悪しありますが。また音楽も少しずつ聞いて知らないアーティストを好きになることなどできていることは感謝なことです。

そんな感じです。広報活動...何もしてなくてすみません。あまり反省していません。また面白そうなのが思いついたらやります。僕自身もっと世界を広げて、そしてこのコミュニティを世界へと広げたい、そう思っています。

三浦：羽賀さんも今年で後期研修終了ですね。よかったらぜひ腎臓内科へ。

当院も 3 年目の先生が 1 人入り、今年から 1 人抜けますが新たに 2 人入るなどで、少し賑やかになりそうです。医局フリーなので、るつぼと化しておりモラトリアムでもよいので羽賀さんもきてくれたら楽しそうです。

上西：あけましておめでとうござ

います。私はこのような素晴らしい場所に参加させて頂いていることが不思議な感覚です。

今年一年、というよりはこれまでも薬剤師。この職種は一体何のために存在しているのか。僕には一体、患者や医療のために何が出来るのかと考えてきました。やはり答えが出ないまま、ただ闇雲に走ってきました。色々な先生や他職種の方々と活動することも増える中、考えや目的を理解してもらえればそれなりに仲間が増えることを実感できた年でもありました。皆様のお力になれることがあるのか不安です。しかし、これほどまで豊かな先生方と過ごせるのが楽しみです。

周りから期待されていないと気づくと幾分か心が楽になることがありました。(井本先生ありがとうございました。)

先生方もきっと薬剤師って何をしてるんだろう、何故僕がここにいるのかとお思いのことかと存じますが縁だと思って置いておいて下さい。

よくわからない話をだらだらとす

みません。今年もどうぞよろしく  
 お願いします。

コロナ禍、子供と過ごす時間が以  
 前より格段に増えました。子供が  
 以前より僕に懐くようになりまし  
 た。それだけではないにして、一  
 緒に過ごす時間の長さも心の距離  
 に関係するのかなと思うところ  
 です。子供は癒しです。

井本：みなさん、様々に不安を抱  
 えて過ごしておられますね。死ぬ  
 まで生きるしかありませんし、明  
 日死ぬやもしれませんし、大丈夫  
 ですよ。と無責任な雑念がふと浮  
 かびました。

死ぬまでは、あるいは死んでから  
 も、頂いたご縁を大切にしよう  
 と思います。みなさんとのご縁に深  
 謝します。（なんだかどこぞの坊  
 主みたいですね）

今後もし楽しいことをしましょう。  
 発熱患者が増えてきました。僕は  
 昨日と今日と明後日が当直です。  
 なんとまあでたらめな。

三浦：井本さん、明けない夜がな  
 いくらいですね。お疲れ様です。  
 年末は喉を枯らしながら当直をし

ていたら明けに研修医の先生たち  
 がのど飴のご褒美をくれました  
 （最近子供も重くなったせいか  
 当直より子供と遊んだ次の日の方  
 が腰がきついです）。

上西さんのお話で思うことは、医  
 者も無力ですね、ということ  
 でしょうか。結局助かる方は勝手に  
 あるいはルーチンの治療で治り、助  
 からない方はどうしても治らない。  
 下記は私たちの科のチームの掲げ  
 るスローガンです。

- 書を捨てよ、病棟へ出よう  
 （ベッドサイドで）
- 一日一善（日々学びを）
- memento mori（危機感を忘れ  
 ず）
- 抜苦与楽（生かすより癒しを）

多くのものはあまりに遅く死ぬ。

ある者たちはあまりに早く死ぬ。

.....死ぬべき時に死ぬ。ツアラト  
 ュストラはそう教える。

（フリードリヒ・W・ニーチェ  
 『ツアラトゥストラかく語りき』）

医者が治せる患者は少ない。しか  
 し看護できない患者はいない(中井  
 久夫『看護のための精神医学』)

ついでにニーチェと中井久夫。  
ICUなどで最初から救命できない  
ことが容易に想像のついた管だら  
けになった高齢者の末路を見てい  
ると、私がしたいのはケアの方だ  
なとつくづく思います。

井本：皆様。過酷な連続当直が続  
きましたが、最後の当直深夜 3 時  
に強めの腹痛にみまわれました。  
尿路結石でした。時を同じくして  
件の彼の大きな方針も定まり、一  
連のあれこれが、わたくしの尿管  
に石が落ちるということで終幕し  
たわけです。憑き物が落ちるよう  
に、この石も落ちなければならな  
かったのでしょうか。かくして私は、  
休養の機会を賜り、平日の午前に  
世界平和について考えることがで  
きるわけです。

ケアの日本語をどうするか、われ  
われ臨床文藝医学会が決着をつけ  
ましょう。僕は以前は、ケアを日  
本語は「寄り添う」だと思ってい  
ました。しかし、そこには「寄り  
添うことができる」や「寄り添わ  
なければならない」といって治療  
者側の願望や意図が反映されてい

ます。

「なんであんたに寄り添ってもら  
わなあかんねん。あんた誰やねん」  
と思う人も当然いるわけで、家庭  
医が鼻息荒く、寄り添いますと思  
念したとて、独り相撲なわけです  
ね。

長らく地域医療に従事する古参の  
医師はそのあたりをとらえておら  
れるようで、「ケア＝寄り添う」  
は最近の流行で、彼は「つかず離  
れず、そばで見ている」だと思っ  
ているとのことでした。

地域とケアといえは、ある家庭医  
は“A community exists when people  
care for each other”  
と表現しました。

"Cure sometimes, relieve often,  
comfort always"

16 世紀のフランスの外科医、  
Ambrose Pare の言葉ですが、ケア  
という語は含まれませんが、キュ  
アには限界があるがケアはできる。  
といった意味でしょう。三浦さん  
が紹介して下さった中井久夫の言  
葉と随分と似てきますね。

三浦さん、是非ケアについてやっ  
てみましょう。われわれが協力す  
ればキュアの限界がより明瞭に見

えるようになるでしょう。  
ちょうど最近、僕の恋人、大東さんと「ケア」についてディスカッションしていました。  
彼の豊かな思想を以下に紹介します。

—————  
ケアの訳語はたしかに難しいです。日本語に果たしてそのような語彙があるのでしょうか。東アジアに「ケア」に相当するところや体の働きが、西洋文明以前にあったでしょうか。

もし仮に、「ケア」が、キリスト教的な個人主義を基礎として、その「空を飛ぶすずめより価値がある（マタイ 6.26）」各個人を尊び、その個人の精神を深く理解し、また自身の精神を対象の個人に理解してもらふことであるならば、「ケア」は日本語にできぬのではないかとも思います。

雨森先生が「つかず離れずそばで見ている」と仰ったことは示唆に富むと思います。  
非西洋人である我々は、自然を虚心坦懐に見つめることで神を感得してきました。

役行者が吉野山の中で蔵王権現を「感得」したような営みです。  
それはあるいはカイラス、泰山、白頭山、マウナケアなどでなされてきた営みと同じかもしれません。その感得ということのを和語で言うならば「みる」に近いのだと思います。

相手の、相手すら気づかない本質（があるのかないのかわかりませんが）を目を凝らしてみることで、それは「親しくなる」とか「睦む」とはまた違うことかもしれません。

「寄り添う」ということは、動物的な群れを作るような親しみかもしれません。権威が無くなった、相対化した、わかりやすい価値のみが支配する現代にふさわしい、動物的で直接的な営みです。「寄り添う」にはそのような要素が部分的にある気がします。

それも人を助けます。しかし私たちは人間ですから、孤独に死に向かう時、実存的な恐怖が迫るかもしれません。その時、長い時間を共有したわけでもない医療者が寄り添うなどと言っても、「なんで

見もしらんあんたなんか寄り添われなあかんの」という、至極もったもんな言説になる気がします。

医師という立場は、以前井本先生が仰った通り、「ただの科学的な専門家」のみでなく、否応なく「死」に臨接した「祭祀者」に類似した存在と思います。

本質的な恐怖を祭祀者としての医師が観ることがもしかしたら奥底で何か、互いの救いになりはしないかと僕は思っています。

祈りつつ、目を凝らして観ることで、なにかの本質に近づけないかと思うのです。

上西：井本先生、ご自愛ください。ケアという言葉は深く考えたことはなかったです。キュア＝治療、ケア＝手当てくらいの感覚でいました。

寄り添うということはできるものなら素晴らしい。でも、それを求める人とそうでない人がいるのも事実だと思います。あるいは求めている人も求める先が人によっては違うものだと思います。それを見極めることもケアの質を高めることだとも思います。適当な患者と

の距離をとっているうちに各々の距離感が変わってくるのではなかと思っています。

自分や職種の固定概念で寄り添うを謳って、良い事をしているとケアに当たる人達をみているとただの押し売りにしか思えないのです。だからと言って僕自身どうすればよいのか、役割も方法もわからないのですが。

先生方の投稿を十分に理解できていない返事かも知れませんが、すみません。

三浦：ありがとうございます、勉強になります。ハイデガーのSorge=careという視点では魂への配慮や魂のお世話というニュアンスがうまれるのでしょうか。シュヴィング的接近（看護師シュヴィングのそっとそばにいる態度）なども考えると私は日本語の看護という言葉は悪くないのかなという気もしています。

看護る（みまもる）、魂のお世話をします。

言うは易しですので、実践していきたいですね。ただそばに居ることの中には言語化できない営みが

多く含まれているでしょうね

お世話というより配慮でしょうか  
やはり、押しつけがましさが少ないニュアンスでいうと。

上西：看護のはすごく暖かいですね。

井本：中井久夫にしろ、シュヴィングにしろ精神科に関わる人たちですが、精神科疾患はそもそも治療が難しい、あるいはそもそも治療の必要があるのか不明で、治療者は無力感を感じやすいのかもしれませんが。軍医として従軍した Ambrose Pare も自分の（時代の）治療について無力感が強かったようです。無力感は、上西さんも三浦さんも最近ここでおっしゃっていました。治せない、あるいは治さなくてもいいものへのまなざしが、その人にあるかどうかということが重要になるでしょうか。

端的に、ケアは、「まなざす」でもいいかもしれませんね。

しかし、まなざす、と言っても、素人にもできるニュートラルなまなざしではなく。

（とって、玄人にしかできないまなざしがあるのか、そこが問

題。）

「みまもる」は「み（＝まなざす）＋まもる」で一つ、治療サイドにギアを変えた感じがありますが、ちょうどいいのかもしれません。看護を「みまもる」と訓読みするのは面白いですね。看護の印象が少し変わります。

変わるといえるか、無味乾燥な音読みが意味のある訓読みになるだけの差異があります。

余談ですが、いつか「見る、看る、診る」とだけ書かれたハガキをいつだか人からもらったことがあります。訳せば”look, care, cure”となりましょうか。

そもそも訳す必要はないのかもしれませんが、カタカナで定着していると、日本語が気になってきます。

上西：

<https://core.ac.uk/download/pdf/148427154.pdf>

（岩田 誠『ケアとは何か？』）

インターネットで単純に調べたものです。すみません。まなざすやみまもるといのが本来なのかも知れません。

井本：ありがとうございます。な

るほど、生命というより生活の現在と未来を配慮する、ということですね。語源からのアプローチは面白いですね。

三浦：生命ではなく生活を配慮する、というのはいいですね。みるの話で思い出したのですが、精神科医の神田橋條治がきくを聞く、聴く、訊くとわけていて、聞くはただ話をよく聞くということ、聴くはじいっと心で聴いている、ただこれは素人でもできる、訊くは訊ねるで患者の心や身体の不自由になっている部分を見つけて、働きかけをして少しでも自由な部分が増えるようにする意図でする行為、という分け方をされていて適切に訊けるのがよい医者であると述べています。英語なら hear, listen, ask でしょうか。

精神科医のユルク・ツットは「患者は眼差され、語りかけられる者である。幻聴にたいするものは幻視ではない。注察妄想、つまり人に見られているという意識（見られ意識）にもとづく妄想である」と言ったそうです。それも考えると統合失調症の急性期などの患者

では適切に訊いたり、眼差したりすることが非常にむずかしい、ほとんどの場合きかない、みないというのが保護的であったりする、ということもあるのでしょうか。

だからただそばにいる、というのは配慮の上であえてきかない、みない、時機をとらえて適切にきいたりみたりできるタイミングを待つということなのでしょうね。

生活を護る。生活にもっと柔らかな言葉があてられるといいですね。暮らし？人の暮らしを護る、配慮する。そうするとかなり広くなりますね。

看守と看護でもだいぶ意味も変わりますし、日本語はなかなか奥が深いですね。

「甘え」の構造で有名な土居健郎も医学用語をできるだけ馴染みのある言葉で表現するよう心がけていたようですが、柔らかい言葉で表現することがそのまま「治療的、保護的」である可能性も配慮してのことなのでしょうね。

井本：ありがとうございます。とても勉強になります。ユルク・ツットの話は面白いですね。

小林秀雄が強盗をいなした逸話を思い出しました。刃物があったとして、刃物を見ると、刃物の刃物らしさに加担することとなる。刃物を見ない、診ない。笑いと一緒だな、と直観しました。

笑ってはいけない。

神田橋の指摘も面白いですね。自由な部分が増えるようにするというのは、なんとも具体的でわかりやすいです。そう言えば確かに僕も他者の内にある束縛に眼差しがどうしても及ぶ。この束縛の目利き、というものがあそうですね。そこにアートが。

記憶は未来の選択を束縛するのではなく、自由にする可能性を秘めている。自由意志と投企について、ベルクソンをもうちょっと勉強してみます。

三浦：潜勢力ですね。記憶の堆積から他の可能性を掬い上げる、という。個人であればそれがケアにもつながり、社会であれば或いは革命にもなりますね。

上西：“私どもは平生、なんの気なしに、見てみるとか、聞いてみる、とかいうことばを使っております

が、その見てみる、聞いてみるという、その「みる」というのは、つまり心眼のことです。心の眼でものをみることです。

“ただ観察することで、、慈愛のみ手を一切の人々のまえにさしのべられつつあるのです。”

抜粋:高神覚昇『般若心経講義』

この下で、哲学をすること、芸術についても少し触れられています。井本：なるほど、三浦さんの革命というのはそういうニュアンスだったのですね。僕にとっては、「ケア=愛でる」と、新たに大和言葉で提案しましょう。何を目指して愛でるかということ、花が咲くように愛でる。愛でた結果として革命が成る。

語源から言えば革命は「天命が革る」のなので、天命というものが成る（天命はさらに中華思想の天命なので、西洋の revolution とはおそらく違うんでしょうが）。

革命も、子育ても、看護も、祈りも、全て「花が咲くように愛でる」という営みの一つ。

振り返ればとおの昔から自然とそう考えていたことに気がつきまし

た。

植物は適切な水と温度と酸素があれば、もろもろの束縛が解放されて、自由に花として花咲くわけです。束縛をまなざすということと、可能態をまなざすということは同一で、可能態にすでに自由が孕まれている。

花が咲くように愛でると言ったら、花が咲く必然性は無いわけで、咲くものも、咲かないものも、全て見、愛でる。

神田橋もよもや全ての患者を自由にするなどとは思わなかったことでしょう。そもそも咲かないものとして、やはり咲いている。

なるほど、ふむふむ、高神先生の慈愛も同じ語法でしょうね。得心いたしました。

三浦：キリスト教の普遍論争で一般的にはスコトゥス派の实在論は普遍的なものが実在する、という考えだと解釈されているが実際には確定されないものを事実的にもより原初的で優先的なものとみなす立場なのだそうです。スコトゥスにおける個体とは本来的に不確定で、特殊性の枠をはみ出してしま

まう、故に普遍性へと開かれている。この個性はこのもの性などとも言われ、ドゥルーズの差異の奔めき合い（ひしめき合い）にも通じています。この個体の本来的な不確定性、差異を愛でる、ということがそうでもあり得たかもしれない可能性への眼差しとなるわけですね。生命、存在を見て、非生命、存在しないものへの慈しみを感じるのが「もののあはれ」でしょうか。

私はこの偶有性の認識、他でもあり得たという想像力を小公女セラの想像力と勝手に呼んでいます。愛でるというのは素敵ですね。いつか芽が出るように、という含みもありそうですね。

上西：ケア＝愛でる。よいですね。じっくりきます。

私なりのケアができるように、勉強していきます。

井本：個体が特殊性の枠をはみ出す故に普遍性へと開かれる、というのはもう少し詳しく知りたいなと思いました。そうでもあり得たかもしれない可能性への眼差しというのはつつい僕も考えてしま

います。

別の世界線というのはサブカル的にも頻出のテーマですね。シュタインーズゲートなど好きです。マドマギより Fate が好きです。ゆっくり本を読む時間が欲しいものです。

早く本とお酒の余生を過ごしたい。あと美人がいれば完璧でございませう。

みなさんにご相談した僕の後輩ですが、あと数日といったところまで来てしまいました。

明日も往診します。今日は当直です。

羽賀：Fate 懐かしいですね...

三浦：個体の不確定性はキリスト教で隣人愛がなぜ神への愛と結びつくのかの根拠ともなるのだと思います。イエスとか三位一体説の精霊の存在はこの不確定性を体現していて、人でもあり神でもある存在を媒介にして、「人を愛する＝神を愛する」を可能としている。人を愛する、即ち神を愛すること、個（特殊性）を愛することが神（普遍性）への愛へと開かれる。誰かを愛することがそのまま神

（世界）を愛することでもあるというあり方を保証しているのがイエスということになるでしょうか。その反面、イエスの愛は資本主義とも結びついてしまう。利子は神と人の愛の子（あいの子）である。

だから普遍性の回路は時には厳しく離断しなければならないのだとも思います。若さは可能性だと言われても可能性を、未来を「現実」として消尽されては困るのです。なんだか話がごちゃごちゃしてきました、すみません。

あと数日。。よいお別れをしたいですね

ちなみに、「お別れをする」は井本さんの案出した概念だと思っています。私も昨年ひとり、井本さんに倣ってお別れをしました。

井本：皆様、僕の愛する後輩が今日のお昼に旅立ちました。昨日、今日と混沌に混沌を重ね、どうしようもなく膨大なエネルギーが僕に降り注ぎました。言語にするのはやはり不可能なようです。しかし、いますでに、彼の笑顔と言葉が有りありと見え、聞こえます。

皆様に、時々にご報告できて僕としても心が落ち着きました。ありがとうございました。

上西：何と言葉にすればよいかかわりません。すみません。先生が勇気を持ってこのグループに文章で残して下さったことにも感謝致します。

心よりご冥福をお祈りします。

羽賀：井本先生、お疲れさまでした。

（日時：2021/01/01～2021/01/21、

場所：Line 上）

ケアに関して会員が Line 上で話した内容を編集し掲載。